

ガンコ親父の

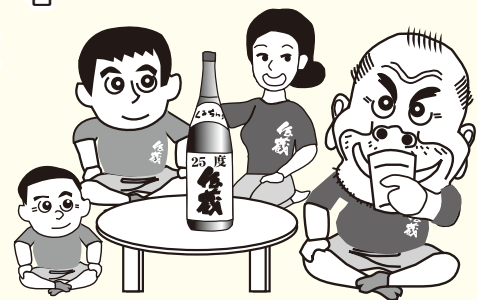
松次郎が勤める城内は夏になると暑くてたまらなかった。戦国の世と違って平和な時代だったので、侍たちもだれていた。特に厳しい昔を知る年配の侍たちからは「これくらい気温でへばってどうする」とハツパをかけられていた。ある日、退屈していた侍たちのために、お城をあげて納涼肝試し会を開くことが決まった。暑い夜を涼しく過ごすためにはもってこいの催しだったが、実は松次郎はお化けの類が大嫌いだった。剣術も走ることも得意で、藩の上層部からも武士の見本として認められているほどの男らしい男だったが、この世のものではないモノにはまるっきり弱かった。松次郎は珍しく愚痴をこぼした。

「城下町の中には歴史的にも楽しめる場所が多いので、拙者が肝試しのコースを設定してやる」と意地悪な家老はニヤリと笑った。「後で肝試し会の感想文を書いてもらうが、最優秀賞として金一封も殿に用意してもらうことになった」。使用人の女性が大切な皿を割ってせっかんに受け自殺したという、夜毎すすり泣きが聞こえてくる井戸。さらし首が置かれていた用水路の脇。人魂やろくろ首が出るという柳の下。夫の不倫から始まったことなのに、騙されて屋敷から追われた女性の復讐劇の場所など、どの肝試しポイントも背筋が凍りそうないわくつきの場所である。

肝試しの当日になった。歳の若い順に肝試しコースを回ることになっていた。スタートを待つ間に、出かけたばかりの後輩侍の「ぎゃー」という声が聞こえてきて震えた。いよいよ自分の番である。松次郎は震える足元を武者震いだと思いつき自分を騙しながら、硬い表情で歩み始めた。

暗がりの狭い路地にやってくる。生温い風が柳の枝を揺らし、頬をかすめる。その瞬間、ヒューッと人魂が宙を舞った。松次郎は腰を抜きそうになりながらも我慢して歩いたが、一刻も早くその場から逃げ出そうとすぐに小走りになった。確か、その先に三段になった石段があったはずだ。暗いので注意しなければと思いながら、脚をそらりと出した。一段、二段、三段と慎重に脚を下ろした後、平地のはずの四段目にそらりと下ろした爪先が地面に着地せずさまよった。家を出るときに妻の貴代からは「夜は暗いので、特に足元には気をつけてくださいませ」と念を押されたことが脳裏をよぎった。

こんなことがあっていいものなのか。鳥肌が松次郎を覆った。先をいく後輩より大きな声で「ぎゃー」と叫んだ。あまりの大きい声に隠れて様子を見ていた家老が逆にびくくりして、飛び出してきてしまった。「どうした？松次郎」と声をかけたら、「み、三つしかない段差が四つありました。四つや、四つや、四つや階段」と松次郎は取り乱して言った。「何を言っているか。四谷怪談の仕掛けはもっと先だ。しっかりせい、武士らしくないぞ」。情けなくも松次郎は家老の腕の中で気を失った。夏の夜、こんな催しの後は『しまっちゅ伝蔵』の冷たい水割り最高だと思うが、残念ながら江戸の世には、まだ『しまっちゅ伝蔵』は存在しなかったのだ。ふふっ。



奄美黒糖焼酎

伝蔵
でんぞう

昔ながらの手造り
こだわり焼酎

喜界島の豊かな大地の恵と豊かな自然の中で、永年の伝統に受け継がれた製法でじっくりと醸しあげた『しまっちゅ伝蔵』黒糖焼酎の味を全面に出し昔ながらのkokoroのある味と香りです。



喜界島酒造株式会社
鹿児島県大島郡喜界町赤連2966番地12
TEL 0997(65)0251

25度
好評発売中

2009年10月喜界島は「日本で最も美しい村」連合に選ばれ加盟しました。喜界島酒造は、この活動を応援しています。



「怪段」に乾杯!!

<http://www.kurochu.jp>

お酒は20歳になってから。お酒は楽しく適量を。飲酒運転は法律で禁止されています。妊娠中や授乳期の飲酒はお控えください。